

| | |
|------------------|---|
| Title | 自由人連盟と加藤一夫：連盟の創設過程を中心に |
| Sub Title | The Libertarian League and Kazuo Katoh |
| Author | 小松, 隆二 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1987 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.80, No.4 (1987. 10) ,p.368(84)- 374(90) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19871001-0084 |
| Abstract | |
| Notes | 研究ノート |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19871001-0084 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

自由人連盟と加藤一夫

—連盟の創設過程を中心に—

小松隆二

1

1920年5月、アナキズムないしは反権力主義に立脚する一つの思想団体が東京で創設されている。名称は自由人連盟といった。加藤一夫を中心に、浅野護や木村信次（信児、『自由人』創刊号の編集を終えてから、青島に職を得て、日本を離れた）らが語り、結成に踏み出したものである。すぐに佐野袈裟美、石渡山達、丹潔らも参加し、初期の担い手となっている。性格的にはアナキズムや反権力主義の啓蒙と実践を兼ねた団体であったが、もっぱらその種の思想を抱くもののみによる団体としては、比較的早い時期の発足とあってよいだろう。

アナキズム運動が本格化し、多くの団体や機関紙誌が簇生するのは、1921年以降である。自由人連盟が、そのような時代の到来に先がけて、つまり日本アナキズム運動の特徴の一つであった多くの群小団体の先駆として創設されていることは、1919年に発足している大杉栄らの労働運動社とともに、アナキズム史にとっては注目される動きであった。とりわけ、労働組合を除けば、1926年に黒色青年連盟が登場するまでは、自由人連盟はアナキズム系思想団体としては、最大の組織とあってよいので、アナキズム史にあっては、無視できない存在であった。と同時に、その中心の一人であった加藤の生涯と思想的遍歴にとっても、自由人連盟とその時代はきわめて重要な意味をもっている。その時代こそ、

彼が社会思想・社会運動にかかわった長い年月においても、実践にまで深くかかわった唯一の時代でもあったからである。

自由人連盟を語る場合、それに先立つ加藤の個人紙『一隅より』とそれに拠った「一隅の会」の活動が忘れられない。

ところが、『一隅より』もその活動も、全体像にわたってはまだ明らかにされるにはいたっていない。『一隅より』は名前のみは文学史や思想史書などに稀にみかけることもあるが、これまでその内容まで詳細にふれられることはなかった。小さなリーフレット風の個人紙であったが、『一隅より』の全揃いを一般にはめったにみるができなかったのも、その内容や活動が明らかにされなかったのは、当然でもあったといえよう。

このように自由人連盟の成立過程を明らかにするには、その先導役を果たした『一隅より』とその活動が、きわめて重要になるわけであるが、本稿の課題はあくまでこれまで明らかになっていない自由人連盟の創設事情とその役割を解明することにある。そのため、『一隅より』の全体像は別の機会に改めてふれることにして、ここでは本題の解明に必要な範囲でふれるにとどめる。

以下に、『一隅より』はじめ、当時の資料にもとづいて自由人連盟の成立過程を明らかにすることにしよう。

2

すでに触れかけているように、自由人連盟は、一隅の会の活動を通して生みだされたものである。同様に『自由人』も『一隅より』の延長上に生み出されたものである。

自由人連盟の創設は1920年5月であるが、それに向けての動きが見られ出すのは、『一隅より』を刊行して間もない同年早々からであった。自由人連盟の結成の企てがアナキズムや思想運動の機関紙誌に紹介されるのは、おそらく『一隅より』の第5号(1920年5月)がはじめてであろう。また個人通信紙的な『一隅より』に代えて、新たに研究誌の性格をもつ雑誌型の機関誌の必要が加藤ら関係者によって表明されたのも、同じ『一隅より』においてで、すでに自由人連盟を発足させていた1920年7月の第6号においてであった。

『一隅より』は、周知のように加藤一夫の個人紙であった。大正期の社会思想・社会運動にあっては、個人紙誌はきわめて重要な役割を演じている。その時代に世に送り出された高田集蔵、中里介山、江渡狄嶺、宮崎安右衛門、有島武郎、賀川豊彦らの個人紙誌はよく知られたところであるが、いずれも各人の精神史・思想史においてきわめて大きな位置を占めていただけでなく、当時の日本の社会思想、文芸思潮、あるいは社会運動全体においても重要な意味をもつものであった。加藤も繰り返し、個人紙誌を送り出すが、その最初が『一隅より』であった。

加藤は『一隅より』の刊行に際しては、それ以前の『科学と文芸』『労働文学』では果たしえなかった、ただ1人ですべてをとりしきり、責任を負う性格の機関紙、つまり個人紙の刊行にこぎつけたということで、かつてとは違う充実感を表明している(『一隅より』第1号。表題はついていないが、あとがきにあたる末尾の報告の部分に表明されている)。それは、他に発表の場がないので個人紙誌を刊行するということから

はなく、自分一人の責任と努力で執筆、編集、刊行のすべての作業を行うという意気込みからの充実感であった。そのように自分のいいたいこと、やりたいことを中心に、自己の全体をあるがままに表白するという点では、むしろ厳しい地点に立っての個人紙への取り組みであった。人間、個人、自我といったものがかつてなく大きな意味を認められ、その拡充、発展が一つの目標になった大正期にいたってはじめて可能になった視点であり、取り組みであった。この点は、加藤のみか、大正期の個人紙誌発行者にある程度共通する姿勢であった。そこからは、明治期とも、また今日とも違った意味が、大正期の個人紙誌には付与されていたことがうかがえるだろう。

3

『一隅より』は6号まで続くが、大きさは変形判(タテ14センチ、ヨコ38.8センチ)の第5号を除いて1~4号および6号はB5判である。頁数は変形の5号を含め、すべて4頁である。発行所は加藤の自宅(東京府下東中野1030)におかれた交響社。発行・編集人は加藤、印刷所は当初は冬夏社工場、のちに大成社印刷所に変わっている。

『一隅より』が世に送りだされた1920年という、戦後恐慌が本格化する年である。すでに前年の1919年に入る頃から失業が問題になりだしていたが、20年はまさにそれが広範に社会問題化する年である。ブルー・カラーのみか、ホワイト・カラーにも失業が拡大し、たとえば卒業をひかえた大学生にまで続々と就職内定の取り消しがでるほど不況が深刻化していくのである。

それに対応して、1919年を境に、労働運動などあらゆる社会運動が全面的に開花する。20年に入ると、労働運動や社会主義運動はいっそう高揚する。とりわけこの年、原内閣の下で普選が遠のいたことが確認されるので、反議会主義

なりサンジカリズムなりが広く受容され、労働運動の全般的な戦闘化が促されることになる。第1回メーデーの実施、最初の大衆的性格をもつ社会主義者の全国組織である日本社会主義同盟の結成などもこの年に行われている。

このような状況の中で、加藤は『一隅より』を創刊。同時に伊藤証信の『精神運動』などにも協力・寄稿した。『一隅より』はもともとは加藤の迷いと試行錯誤の中から産みだされたものであった。それに先立つ『労働文学』(1919年3月創刊)は、その名称そのものの創唱はじめ、注目されたが、加藤らの反省では自分たちが「真の労働者でなかった事」(「謹んで新年をお祝申し上げます」『一隅より』第1号)を最大の理由として長つづきせず、失敗に終わっていた。その後、文学と思想の間で「永遠的な仕事」(同上)を求めて努力し、苦悩を繰り返すが、明快な指針や自信は容易には得られない。そんな状態の中で、1920年の新年を迎えるにあたり、『一隅より』を「手紙」代わりに刊行することになった。それは宗教を基調に、生活と文学(芸術)と社会思想を受けとめなおしてみようとした苦悶の産物にはかならなかった。

ところが号を重ねるごとに、『一隅より』は「手紙」の代わりであることには変わりはないが、文学や平穩な思索のレベルを離れて、社会思想的視点に重点を移していく。ほどなく現秩序・体制に対峙する姿勢までを強く押し出すようになっていく。たんなる思索や観照からの出発が時代の激動を背景に、体制批判、さらにそれを実践に向ける社会運動に結びつく方向に急傾斜していったのである。立場としてはアナキズムのそれが鮮明にされていく。とりわけ1920年3月には、その月を通して、単行本にするために『無明』の原稿整理に打ち込むが、その仕事を終える頃から、アナキズムの色彩が強まり、『一隅より』の第5号を刊行する頃には、資本主義体制の崩壊の必要性和アナキズムの視点がいっそう明確に打ち出されるにいたる。その結果はあいつぐ発禁であった。4号、5号(変形

判で無届けで発行する形になった)、6号といずれも発禁になった。

『一隅より』の紙面の変化とそれに対する当局の弾圧の強化とともに、それに対抗するように、加藤は思想団体の講演、演説会にも頻繁に出席するようになった。また4月には、巢鴨・鬼子母神の穴に住む穴仙人佐藤耶蘇基(八十亀)とともに、日曜日ごとにその穴の前で演説会を開くこともした。しかしそれはすぐに警察によって禁止されてしまい、1カ月ほどで中止せざるをえなくなってしまう。

このような状況に直面して、加藤は『一隅より』およびそれにもとづく活動に限界を感じるようになった。敵しい抑圧に対抗し、また活動の幅を広げるために、個人紙を超える出版活動の必要を感じるようになったのである。発禁や弾圧に遭遇した当初は、『一隅より』のような個人紙さえあきらめて、「もう、出版物などしないで、純然たる手紙にしよう」と(「一隅の事」『一隅より』第5号)、形式だけは後退して弾圧の心配のない私信の方法をとることも考えてみる。しかるに、当時は労働運動や社会運動の高揚が急速であり、加藤もその流れに共鳴していた。その結果として、形式においても「手紙」に後退するのではなく、むしろ個人紙としてのそれまでの『一隅より』の枠・限界を超えていく方向を選ぶことになった。そこに生み出されるのが『自由人』であり、また自由人連盟であった。『一隅より』の4号が発禁になったところで、自由人連盟に移行する方向が木村信次らと検討され、ついに連盟の結成にすすむのである。

その結果、『一隅より』が次の5号の刊行をみるときは、ごく少数のものによってではあるが、すでに自由人連盟は出発するまでになっていた。同号にはそのことが次のように記録されている。「今度二三の友人と相談して、自由人連盟と云ふ団体をつくりました。この会には、特に知識階級と労働階級の人々を歓迎します。そして両者が提携できる様にと望んで居ます。

アナキストとサンジカリストと連合にしたいと思ひます」。この記述からも、『一隅より』をやめる前に、まだ正式の発会式を行うまでにはいたっていなかったが、ともかく加藤中心にわずか3、4名によってではあるが、明快にアナキズムを目標とする連盟を発足させたことがうかがえるであろう。

つづいて『一隅より』第6号には、自由人連盟がいよいよ正式に発会式を挙行したことが紹介される。同時に、一方で既存の『一隅より』を労働者向けの平易なものにする方針、他方で新しい研究の性格をもつ雑誌、すなわち『自由人』の刊行計画も紹介されている。「別に純粹に思想的研究的の小さい雑誌を出すかもしれません。ある出版業者は、私の精神に同情して呉れて紙代だけ寄付して呈ると申込んで呉ました。しかし印刷代を自分達の方で出すとすれば少なくとも五、六百円の金があるんです。そしてそれが中々出来ないんです。で、此の『一隅より』の読者諸君にして若し少しでも御寄付下さるならば非常に嬉しく思ひます。雑誌の名は自由人 とします。」(前掲「一隅の事」と報告されているのが、それである。

ここにいたって、いよいよ自由人連盟の発足、そしてその機関誌としての『自由人』の刊行の方向が確認されるであろう。

4

以上にみた『一隅より』の記事を通しての推移をたどるだけでも、自由人連盟の創設過程は大体うかがえるであろう。その紹介のとおり、発会式が行われたのは、1920年5月28日であった。

発会式の会場は神田・猿樂町にあった明治会館であった。午後6時から講演会を行うのがその主行事であった。講師には高逸漢(北京大学教授)、岩橋莫愁(日華公論主筆)、大杉栄、新居格(当時は東京朝日新聞記者)、それに加藤一夫らが予定された。「当日は横暴なる官憲の圧迫

と明治会館の背信とで、大もめにもめ」た上(『一隅より』の記事『一隅より』第6号)、加藤が連盟の方針や思想を説明しはじめたところで、中止、ついで解散を命じられてしまう。その当局の姿勢に対して、参加したアナキストたちが抗議し、反発したことから、大混乱となり、加藤はじめ、岩佐作太郎、和田久太郎らが検束される事態にまで発展した。東京朝日新聞(1920年5月29日)は、この日の模様を「加藤一夫氏検束さる 自由人連盟会発会式の騒動 聴衆と警官衝突」の見出しで次のように報じている。

「加藤一夫氏等主催の自由人連盟発会式を昨夜6時より神田明治会館に挙行、式後引き続き演説会に移りたるも壇上に立ちたる弁士岩佐作太郎、加藤一夫両氏は何れも開口と同時に臨席警官より中止を命ぜられたるより主催者側は勿論詰め蒐けたる六百余名の聴衆は承知せず警官との間に揉み合ありたるが午後7時40分加賀尾西神田署長は遂に解散を命じ加藤氏を始め岩佐作太郎、和田久太郎、矢部清、山本知雄の五名を西神田署に検束し目下取調中なり」

つづいて6月11日に、大阪の天王寺公会堂で、関西地方における宣伝のために連盟の講演会が挙行される。この日は警察の取締りがとくに厳しく、雑誌を販売したといつては警官に殴打されたり、開会と同時に中止、解散を命じられたりしてしまう。この会場でも、それに憤慨して抗議した参加者と警官の衝突があり、負傷者がでた上、和田久太郎らが検束されている。この日の状況も、東京朝日新聞(6月12日)は「椅子や下駄が散乱して大騒動の講演会 荒畑氏等の自由人連盟会大阪で解散を命ぜられる 遂に二名の検束者」の長い見出しの下に次のように報じている。もっとも、和田が「大杉栄先生」などというはずはなく、また荒畑の関与に関する部分もそのまま受け取ることはできないが、以下の記事から大筋はほぼうかがうことができるだろう。

「荒畑寒村、加藤一夫氏等の手にて生れ上

がった自由人連盟講演会は11日午後2時から大阪市天王寺公園公会堂に於て開催された。会場の周囲には百名に近い正服私服の警官が配置せられ警戒物物しき間に聴衆は殺到して来て午後7時より講演会に移り辻潤の『ステイルネルの自由思想』があり数名の弁士の講演後加藤一夫氏は『自由人連盟の使命』と題し自己の精神が必然的に生んだのが自由人連盟であると喝破するや臨監の宮本恵比須署長は解散を命じたので聴衆は口々に官憲横暴を叫び出し場外の警官隊は素破と許り嚴重なる警戒網を張りたので相方紛擾の裡に和田久太郎が突如椅子の上に仁王立となって『大杉栄先生……』と絶叫するや警官隊は同人を引摺り降ろさんとし（一部削除）端なくここに大争闘を演じ椅子が飛ぶ下駄が散乱する、聴衆は我れ勝ちに逃んとして物凄い修羅場を演じた後警官隊に反抗した和田及び東九五郎の二名を検束処分に附し午後9時半散会を告げられた」

翌日の12日には、京都・三条のキリスト教青年会館で講演会が舉行された。ここでは警察当局が敵しい姿勢をみせなかったことで、平穩に会が運営され、講演も無事終了することができた。

かくして東京、大阪、京都で講演会を舉行することで、自由人連盟の創設を宣言し、広く運動陣營の内外にその存在をらしめることになったのである。

5

自由人連盟は正式に発足するにあたって、「宣言」を刷りこんだピラをつくらしている。『一隅より』の読者に送付したり、講演会会場で配布したりするためであった。そこには宣言のほか、会員の募集やその条件の提示もなされている。それによると、会員の条件は、会費月50銭、それに「会に入っても何の特権もありません。

たゞ吾々の精神に賛成な方と一緒にプロバガンダもやったり、研究もしたり、仕事もしたいのです」ということであった。

宣言の全文は次の通りである。

宣 言

我等は我等である。

我等は神の被造物でない。我等は神を造った事はあったが、それが我等を支配しようとした時、我等はこれを蹂躪した。

我等は国家の成員でない。我等は国家を構成した事はあったが、それが我等の上に権を握らうとした時、我等はこれを破壊した。

我等は資本主義の世に生きない。我等は資本主義の合理を信じた事はあったが、それが我等を奴隷にしようとした時、我等はこれを一蹴した。

我等は我等である。

我等は主義によって動かない。主義は我等を縛らうとする。しかし我等は主義の主である。

我等は自由の使徒でない。自由は我等の影である。我等が我等である時、自由は我等に従ふ。

我等は人間性の傀儡でない。人間性とは我等の理性が造った偶像に過ぎない。我等はたゞ我等である。

我等はしかし我等にも固定しない。

我等は常に流動する。我等は常に成長する。我等は常に進歩する。我等は常に燃焼する。我等に於ては一瞬の間たりとも常住の相と云ふものは有り得ない。我等は不断の新である、不断の変化である。そしてこれが我等の生活である。

我等は我等の生活の途上に幾多の障碍の存するを知る。我等はそれを不断に破壊する。新なる不合理、新なる束縛、新なる権力、新なる凝固、かうしたものが小止みなく我等の前に立ちふさがる事を我等は知る。我等はそれを不断に破壊する。破壊なくして我等は存し得ない。

我等には妥協はない。我等には理解がある。親和がある。我等はたゞ我等に於て聯盟する。そして我等の聯盟に於て真の社会が現出する。

かつて社会が我等を生んだ。今や我等は我等の社会を生む。かくて我等は我等の社会の主である。

大正九年五月

自由人連盟

1920年という年は、まだアナ・ボルに代表される社会主義陣営内部で対立が本格化する前であった。第1回メーデーとそれを契機に生み出された労働組合同盟会、日本社会主義同盟などにみられるように連合を模索する動きの方が目だっていた。労働運動社でさえも、アナ・ボル提携の可能性を模索し、翌21年1月には、アナ・ボル協同の第2次『労働運動』を刊行するほどであった。しかるに、その時点で加藤らは明快にアナキズムに立脚する団体の結成に踏み出したのである。

もっとも自由人連盟がアナキズム団体といっても、当初から排他的に「反ボル」の立場を前面に打ち出していたわけではない。同連盟の出発直後から創設が画策される超党派的な日本社会主義同盟にも、連盟としても、また加藤としても積極的に加わっていく。

その社会主義同盟では、加藤はまず発起人、ついで執行委員に任ぜられた。また創立大会では夜の講演会で講師も予定されていた。講師の方は壇上で順番を待っていたが、その前に解散命令が下り、話す機会是与えられなかった。

6

自由人連盟は当初3、4名で出発しているが、すぐに20余名、さらに50余名ほどに拡大していく。加藤の郷里である和歌山県田辺には支部が結成された(1922年暮に黒煙社に変わる)。会員の多くは、労働者というよりも、思想や運動にひかれた学生やインテリゲンチヤ、あるいは特定の職業をもたぬ運動家たちであった。会長や代表は、当時のアナキズム系団体のつねとして、おかれていない。会の活動としては、月1回程

度の茶話会、機関誌や宣伝用パンフレット・ビラの発行、講演・演説会の開催、争議応援などであった。茶話会に集まるものには新居格、白鳥省吾、辻潤、江口渙、宮嶋資夫、和田巖(のちに和田が早世するときには、高尾平兵衛のときと同様に、加藤あるいは自由人連盟は立場の相違を超えて『自由人』においてその死を惜しんでいる)らもいた。講演会などでは加藤はほとんどの場合講師になるが、自らビラはりなどもやっている。

機関誌は『自由人』であるが、創刊は連盟が発足してから半年後の11月である。創刊号の編集、発行、印刷人は浅野護。発行所は『科学と文芸』『一隅より』につづいて、交響社であった。創刊号については、すでに紹介がなされているので(佐々木靖章「雑誌『自由人』のこと」『響宴』第5号、1987年2月)、ここではふれない。2号は1921年1月に新年号(第2巻1号)として刊行されている。編集・発行責任者、発行所などは創刊号と同じである。厚さは1、2号とも菊判32ページ。参考までに2号の内容細目は次の通りである。

| | |
|-----------------------------|-------|
| 断詩 | 小川未明 |
| 国家機能説の不徹底 | 加藤一夫 |
| 日傭取の歌(詩) | 浅野護 |
| 芸術家としてのマルクス | 小生夢坊 |
| 八月十三日の暴動(詩) | 百田宗治 |
| 自由は性愛より(詩) | 森本重生 |
| 人間運動の諸相 | 丹 潔 |
| カール・リーブクネヒトを懐ふ(詩) | 森本重生 |
| プロレタリアの独裁政治を評す | 佐野袈裟美 |
| 非無政府主義者の詩(詩) | 白鳥省吾 |
| マキシム・ゴルギーより H.G. ウェー ルスへ | 原田実 |
| 吹雪(詩) | 三田安成 |
| 黒耀会展覧会感想 | 浅野護 |
| 消息と世評 | 三田反太郎 |
| 編集局より | (タン生) |

佐野袈裟美が編集を担当することになっていた3号以下については、これまで明らかにはなっていない。ただし翌1922年1月からは、リーフレットとして新聞紙法によらずに不定期に刊行する方式に変えられるが、すぐに新聞紙法に基づいて保証金をおさめるよう注意を受け、2号からは新聞紙法による月刊紙として出発しなおす。リーフレット型第2号は3月に刊行、以後同年にわたる第1巻としては8号まで刊行、翌年の第2巻は1月から7月まで6号刊行している。

このように自由人連盟は『自由人』に拠りつつ、活動をすすめていたが、1923年9月の関東大震災の襲来によって、消滅の危機に見舞われる。加藤はじめ、自由人連盟の会員のほとんどが、9月3日という早い時期に警察に検束されてしまうのである。加藤はこれを機に、関西に難をのがれ、しばらく関西住まいの身となる。そこでしばし雌伏し、『原始』(1925年1月)の刊行まで機をうかがうことになる。

それでも、東京の残留組は事務所を代々幡町幡ヶ谷に移して、加藤と連絡を取りつつ再興の機をうかがい、機関紙も復刊の準備に入る。この間の事情を『労働運動』(『同志の消息』第4次第1号、1923年12月)は「平岩、米山、加藤君等によって、『自由人』は続刊されることになり、12月号を『大杉栄追悼号』として出す運びに成った」と伝えている。しかし自由人連盟からは

ついに大杉栄追悼号は日の目をみることなく終わり、連盟そのものも、加藤が実践から距離をおきだすこともあって、再起できずに終わってしまう。

以上のように、関東大震災前のアナキズム系の全盛期に、労働運動社(『労働運動』)とともに、アナキズム系を支え、また盛り立てたのが自由人連盟であった。労働運動社が主に労働運動・社会運動に目を向けたのに対し、自由人連盟は思想、労働、文芸の全般に目を向けた。当時のアナキズム系思想団体としては最大の会員を擁しながらも、組織全体よりもそれを構成する個人・人間の主体性に重きをおいた。それはたんに理念だけでなく、実践としてもそうであった。それだけに組織全体として、あるいは全員が一丸になって動くことが少ないので、顕著に目だった活動や成果を残すというほどにはならなかったが、アナキズム系にあっては特異な、しかも大きな存在であったことはまちがいない。

本稿では、自由人連盟の創設過程を明らかにするのが目的であったので、創設以降、つまり1920年の半ば以降の展開については、『自由人』をふくめ、詳しくはふれなかった。自由人連盟の本格的な活動、また『自由人』の全貌については、『一隅より』とともに次の機会にふれることにしたい。

(経済学部教授)